

Costume and Textile

No.15

服飾文化学会会報

2008年3月



2007年度論文発表会会場(報告はp.4-5)

2008年度 第9回総会・大会のお知らせ

会員の皆様には、既にお知らせを送りましたでしたが、2008（平成20）年度第9回総会・大会を下記のように開催いたします。多数の皆様の参加を得て、活気ある会となることを期待して、あらためて御案内いたします。

開催日 2008年5月17日（土）・18日（日）

開催校 女子美術大学 相模原キャンパス

【研究発表】2号館

【見学会】10号館

女子美アートミュージアム

住所等 〒228-8538

神奈川県相模原市麻溝台1900

小田急線「相模大野」駅北口よりバス
（女子美術大学行）約30分

TEL：042-778-6111（代表）

《プログラム》

5月17日(土)

13:30～15:30 研究発表

15:30～17:10 特別講演

演題1

「女性服装色50年の変遷

一時系列測色調査データを読む」

講師：近江 ^{おうみ} ^{げんたろう} 源太郎 氏

◆講師プロフィール

1940年 広島県生まれ

早稲田大学大学院文学研究科心理学専修修了。女子美術大学教授・学長・美術研究科長、日本色彩学会副会長等を歴任。

現在は女子美術大学大学院教授、財団法人日本色彩研究所理事長。

著書は『色彩心理入門』『色彩感覚データ&テスト』『色彩世相史』『造形心理学』等

演題2

「日本刺繍の特質一絹のかがやき」

講師：福田 ^{ふくだ} ^{きじゅう} 喜重 氏

◆講師プロフィール

1932年 京都市生まれ

父 喜三郎氏に刺繍を学ぶ。1976年より日本伝統工芸展に入選、受賞。出品作には文化庁買上げ作品4点がある。1997年に重要無形文化財保持者(人間国宝 刺繍)に認定される。2000、2001年には、正倉院の刺繍調査に参加し技法調査を担当。

現在、日本工芸会参与、福田工芸染繡研究所主宰。

17:20～17:50 総会

18:00～19:30 懇親会(学生食堂)

5月18日(日)

9:30～11:30 研究発表

展示発表ショートスピーチ

13:00～15:00 見学会 10号館

女子美アートミュージアムにて開催中の展覧会「北欧の夢 ニューヨークの洗練 日本の情緒 脇阪克二テキスタイルデザインの世

界—女子美コレクションを中心に—」を見学します。脇阪氏と女子美術大学工芸学科大澤美樹子氏の解説があります。

見学後、希望者は同館ファッション造形学科の工房を見学します。

◎アクセス

「相模大野」駅までは

- ・新宿より40分(小田急線)
 - ・横浜より35分(JR横浜線「町田」駅で小田急線乗り換え)
 - ・東京メトロ千代田線は「代々木上原」駅で小田急線と相互乗り入れ
- 「相模大野」駅からのバス

◆土曜 7:20～9:50

北口伊勢丹隣グリーンホール4乗り場

◆土曜 10:00～終バス

◆日曜 8:00～終バス

駅前バスターミナル3乗り場

◎周辺のホテル

相模大野駅の真上に

「小田急ホテルセンチュリー相模大野」

042-767-1111 (代)

◎参加費用

大会参加費：会 員 3,000円

非 会 員 4,000円

学 生 会 員 1,000円

学生非会員 1,500円

懇親会参加費：4,000円

◎お問い合わせは

第9回総会・大会実行委員会

実行委員長 岡田宣世

女子美術大学短期大学部

〒166-8538

東京都杉並区和田1-49-8

Tel&Fax：03-5340-4526

E-mail：embdry@joshibi.ac.jp

※開催は相模原校舎、委員会は杉並校舎です。

◎「北欧の夢 ニューヨークの洗練 日本の情緒
脇阪克二テキスタイルデザインの世界ー女子
美コレクションを中心にー」展

今から約40年前、日本のプリント布と言えば、パターン自体に重きを置くことは無く、小花や動物等、誰がどこで使っても目立たない無難な柄がほとんどでした。そのような時代に、脇阪克二氏は欧米に渡り、1968～76年マリメッコ社（フィンランド）、1976～85年ジャック・レノア・ラーセン社（ニューヨーク）にデザイナーとして在籍しました。また、1976～96年には、日本のワコールインテリアファブリックと契約して斬新なデザインのテキスタイルプリントを発表しました。テキスタイルにおいて世界有数のこの3社に在籍して活躍した日本人は氏ただ一人です。

「北欧の澄んだ空気と自然、素朴でぬくもりのあるフィンランド。その地にあるマリメッコ社の大胆で色鮮やかなプリント布に夢を見て、旅立ったこと・・・

世界の才能が集まり、しのぎを削るニューヨーク。ラーセン社の大人の品格を持つ、洗練されたファブリックに魅せられたこと・・・

四季の豊かさとしっとりした気候が生み出す、細やかな情緒の世界を持つ日本。ワコールインテリアファブリックに20年にわたり関わったこと・・・」
（脇阪克二の談話より）



マリメッコ
「BOBOO」

本展覧会では、女子美術大学のコレクションを中心に、氏がデザインした布と手描きによるデザイン原画を展示します。フィンランド、アメリカ、日本それぞれの国の文化の違いや在り方を通して氏が感じたことや表現してきたものを追いつつ、そのデザインの原点を探ります。

展覧会をきっかけとしてテキスタイルデザインの仕事、および生活の場に明るさを与えるプリント布の魅力を伝えることができれば幸いです。

（女子美アートミュージアム広報担当）



マリメッコ 「KARUSELLI」

脇阪克二 略歴

1944年、京都市生まれ

1968～1976年、マリメッコ社、デザイナーとして在籍

1976～1985年、ラーセン社、デザイナーとして在籍

1976～1996年、ワコールインテリアファブリックと契約

2002年～現在、sou・souテキスタイルデザイナー

2005年～現在、京都造形芸術大学美術工芸学科
染織テキスタイルコース
客員教授

2007(平成19)年度 論文発表会の報告

2008年3月1日(土)午後1時30分より、日本女子大学百年館低層棟603教室において、学会恒例の論文発表会が開催された。伊藤紀之会長の挨拶に始まり、卒業論文6件、修士論文3件、計9件の発表は参加者60余名に支えられ、活発な質疑応答のうちに盛会に終えた。会の運営は開催校の皆様の協力により、滞りなく行われた。

発表論文の概要

卒業論文

(座長 高部 啓子) 13:35-13:50

1. 生活におけるユニバーサルデザインの普及率—
衣生活におけるユニバーサルデザインの普及
の現状—

川村学園女子大学 竹内 千里

(座長 塚田 耕一) 13:50-14:05

2. クリストバル・バレンシアガの研究

京都女子大学 鈴木 梨沙

(座長 伊藤 紀之) 14:05-14:20

3. 日本人デザイナーの活躍と表現

実践女子大学 片山 愛子

14:20-14:35

4. E.W. ゴドウィンの衣服観

杉野服飾大学 味岡 徳高

(座長 長崎 巖) 14:35-14:50

5. 万祝一房総地方におけるその制作と歴史—

日本女子大学 山崎 麻衣子

(座長 小笠原 小枝) 14:50-15:05

6. 武将の装いに関する文化史的研究

—変わり兜を中心に据えて—

共立女子大学 渡邊 綾子

竹内論文はユニバーサルファッションの概念を男女共用のコンセプトにまで広げ、'common suit'として製作・提案したところに新しさがあった。

鈴木論文はバレンシアガの造形の独創性を、自らの製作を通じて解明した。

片山論文は現在世界で評価されている日本人デザイナーに共通する「日本人らしさ」と「カワイ

イ」について、作品例を挙げながら考察した。

味岡論文はゴドウィンの舞台衣装における歴史服を検証し、彼のデザインにおける審美性は、当時の改良服運動の多様性を示すことを指摘した。

山崎論文は房総地方に伝来する万祝の流通と性格、また今日にどのような形で継承されているかを明らかにした。

渡邊論文は戦国時代の変り兜を屏風絵や絵巻から検証し、その意義や機能を考察するとともに、それが実戦でも活用されたことを指摘した。



論文発表会座長 伊藤紀之会長

修士論文

(座長 小笠原 小枝) 15:20-15:40

7. 日蘭貿易における輸入染織品に関する研究
—平戸オランダ商館日記の分析を通して—

共立女子大学大学院 高山 知子

(座長 常見 美紀子) 15:40-16:00

8. 19世紀イギリスにおける女性ファッションの
変革

—健康芸術ドレス連盟(1890-1894)の試み—

東京家政大学大学院 菅野 ももこ

(座長 能澤 慧子) 16:00-16:20

9. 19世紀後半のイギリスのtailor-made costume
—女性の社会進出と衣服との関連—

日本女子大学大学院 荻原 弘子

高山論文は『平戸オランダ商館の日記』及び『平戸オランダ商館の会計帳簿』をもとに、17世紀前半、即ち平戸に商館が置かれていた時代の日

蘭貿易を通じて日本にもたらされていた染織品を解明するもので、特に天鵝絨は当時ヨーロッパ産より中国産のものが多く舶載されていたことを明らかにした。

菅野論文は「ガゼット」(Gazette, 1888-1889)及び「アグライア」(Aglaia, 1893-1894)をもとに、当時「健康芸術ドレス連盟」が主張した装いにおける「美しさ」は健康と有用性の調和によって生み出されるもので、その潮流が20世紀のファッション界に広く浸透していったこと指摘した。

荻原論文は主に1870-1890年代の『The Queen』誌と『Punch』誌を比較検討しながら、1872年テラーメイドコスチュームの変遷を捉え、その形は1877年ドレスメーカーの参入などによって実用的な衣服から審美性を兼ねたものへと変わっていくが、本来男性服を作るテラーが作った婦人服であったことから、それ自体が性差を超えるものとして、結果的に女性の社会進出を示す媒体となったことを指摘した。

伊藤会長が開会の辞で「この会が若い研究者を育てる場であるように」と言われたように、これを糧に発表者の皆さんの今後の成長を期待したい。



懇親会会場

懇親会

日本女子大学のウイミンにて16時40分から行われた。蔵方宏昌副会長の挨拶、石井とめ子前会長の乾杯の音頭で始まり、若い学生さん達との歓談のなかで17時30分に盛会のうちに散会。出席者約50名。
(論文発表会担当 小笠原小枝)

●2008年度第9回夏期セミナーのお知らせ

今年度は、北海道の札幌・白老・伊達の各市の協力を得て、2泊3日の日程で開催する計画を立てています。皆様へのお知らせは、5月17、18日に開催される総会・大会時に配布いたします。細部の調整後に、変更があるかもしれませんが、以下に概要をお知らせいたします。

北海道には、先住民族であるアイヌ民族に関わる資料が多くあります。そこで「アイヌ民族の文化と服飾」をテーマに、体系的に且つ専門的に皆様の研究の糧になることを願って、講演・見学を主軸にしたいと考えています。

また、伊達市はアイヌ民族の噴火湾文化を構成する地域であると同時に、明治時代初期に伊達家支藩巨理伊達家が移住、開拓したところです。同市の開拓記念館では、江戸時代後期を中心とした入植時の土族の服飾資料を見ることができます。

期日 2008年8月5日(火)～7日(木)

日程

1日目

北海道厚生年金会館 ウェルシティ札幌にて
オリエンテーション、基調講演、懇親会

2日目

- ・札幌市厚別区厚別町小野幌
北海道開拓記念館にて研修(見学・講演)
- ・白老郡白老町若草町2-3-4
アイヌ民族博物館にて研修(見学・講演)
- ・宿泊地室蘭へ。
希望者は洞爺湖畔湖畔散歩。

3日目

- ・伊達市館山町21-5
伊達市噴火湾文化研究所にて研修(見学・講演)
- ・伊達市梅本町61-2
伊達市開拓記念館見学
- ・千歳空港着 解散の予定

(夏期セミナー担当)

2007年度夏期セミナー「若手研究者によるシンポジウム」



常見 美紀子

伊藤紀之会長、および夏期セミナー実行委員伊藤一郎先生から、夏期セミナーの「若手研究者によるシンポジウム」の依頼を受け、人選にとりかかりました。まず今回のシンポジウムを「若手による研究発表」として位置づけ、第一部は各人が現在行っている研究を発表し、第二部は質疑応答を含むシンポジウムとして企画しました。

「服飾文化」に関する幅広い分野を網羅できるように、日本およびヨーロッパに関する幅広い研究を対象としました。日本の服飾文化を研究している末久真理子氏、1830年代フランス・モードを研究対象としている大澤香奈子氏がまず候補に挙がりました。近年の「モノ」に関する研究領域として「デザイン史」が注目されています。デザイン史はモノの変化の現象のみを捉えるのではなく、背景にあるテクノロジーや材料開発という面から「モノ」の歴史を考察しようとする研究領域です。デザイン史はイギリスで発展し、最近ではジェンダーの視点から捉える研究が増えています。このデザイン史と服飾史の交叉する領域を研究している研究者として鈴木桜子氏を取りあげました。

次に発表内容について少しふれておきます。末久真理子氏の「近世初期における小袖意匠の系譜」研究は、江戸時代のきものの文様を美術史の視点から論じているという特色があります。大澤香奈子氏の「1830年代モードの構造とデザイン要素について—モード誌 *Journal des Dames et des Modes* を資料として—」研究は、フランスがファッション消費をスタートさせて1930年代に発行された *Journal des Dames et des Modes* を基にその時代のモード全体に考察を加えています。鈴木桜子氏の「改良服運動とその周辺—近代デザイン運動との接点から—」研究は、服飾史とデザイン史の関連性に光をあて、新たな史観の探究を試みています。今回のシンポジウムが、他の研究者に刺激を与えるとともに、今後の服飾研究に新たな視座を加えることができたとしたら、シンポジウムの意義があったといえるでしょう。



末久 真理子（目白大学短期大学部 非常勤講師）

今回のシンポジウム「私の服飾研究」において、「近世初期における小袖意匠の系譜」の発表および、パネルディスカッションに参加させていただきました。この発表は、平成18年度筑波大学大学院人間総合科学研究科の学位論文を加筆修正して作成したものです。少し時間をかけて纏めた論文でしたので、ぜひどこかでこの内容を聞いていただきたいと以前より考えていた矢先のことでした。そして今回、この論文の専門領域にとっても近い学会で発表することができ、大変幸運な機会をいただきました。

本発表では、日本の近世初期に発生した慶長小袖から寛文小袖に至る間の小袖意匠の成立、発展の過程を、主に意匠の変遷という側面から論じ、その成立過程の背景にあるいくつかの要因についても言及を行いました。

これまでの近世初期の小袖意匠に関する従来の研究は、当時のいわゆるファッションブックであったひいながたなどが現存していないこともあり、寛文小袖に至るまでの成立の問題やその変遷に関して、十分に吟味されたとはいえない状況といえました。そこで今回、当時の時世粧を表現したとされる近世初期風俗画を用い、数少ない遺品を補いながら当時の小袖意匠についての発表をさせていただきました。引き続いたパネルディスカッションにおいては、各専門分野の先生方から大所高所にわたるご意見や、詳細なご

指摘を頂いて大変勉強になりました。またパネリストとしてご一緒した若手研究者である先生方とも、同世代ならではの共通する課題について意見交換や温かい交流を持つことが出来ました。このセミナーに参加したことで、これからの研究者としてのあり方や激励など普段では伺えない貴重なお話をいただき、今後の研究生生活への新たな目標を持つことができ、充実した時間を過ごすことが出来ました。

最後にシンポジウムのご担当をいただいた京都女子大学常見美紀子先生には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。



大澤 香奈子 (平安女学院大学)

19世紀モード誌を代表する『ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード』*Journal des Dames et des Modes*を資料とし、近代モードビジネスの最初の基礎が築かれた1830年代を対象として、当時どのような服飾表現が展開され、そこに人々のどのような意識が内在していたかを明らかにする試みについて報告した。

当時のモードに見られたトレンドには、スタイルの別に関係なく共通に見られるトレンドと、スタイル別に異なるトレンドの両方があった。共通に見られたトレンドには袖とスカートの膨大化があった。これはいかに生地を大量に使うことができるか、つまり経済力を象徴する浪費の競争が衣装の上で展開されていたということである。この他にはショールの流行が見られた。これについては前世紀の宮廷モードに起こったカシミヤショールの流行の影響を考え、ショールへの憧れとショールの着用という行為そのものが高貴さを象徴していると考えた。

スタイル別では、夜会服のコーディネートは素材や装飾から見ても、豪華さや高価さがそのキーワードとなっていた。一方、散歩服では、さりげなさやシンプルさが全体のコーディネートを支配しており、ここでのキーワードはシンプルさであった。前者では共通のトレンドと同様に衣服が経済力の顕示の役を担い、衣服の所有や使用がもたらす精神的満足感を有していたことがうかがえた。後者では外見の経済力の顕示以外の、より内面的なセンスや品位が他者の評価を左右する要素となっており、モードにおける品位の重要性がうかがえた。

いずれにおいても服飾を通して人々が何かを表現あるいは主張しているということが改めて捉えられた。ここにある、衣装の形態の変化と人々の美意識や感性との関係といった興味深いテーマに今後とも取り組んでいきたい。



鈴木 桜子 (杉野服飾大学)

改良服運動とその周辺 近代デザイン運動との接点から

近代衣服の形成を捉える時、服装史では20世紀初頭のボワレ、ヴィオネ、シャネルらによるパリ・モードの動向にその源流を見出してきた。しかし、それ以前より19世紀後半から、女性の身体を束縛する流行のモードに対する形でブルーマー運動、合理服協会、同時代のデザイン運動の中での改良服の取組み等、「改良服運動」があったことも知られている。今回のシンポジウム発表では、これまで改良服運動が服装史、デザイン史の双方の相容れない史観の違いによって歴史的な位置付けがなされてこなかった経緯を指摘した上で、イギリスを中心とした改良服運動の試みについて取り上げた。

1850年代のアメリカでのブルーマー運動から約30年を経て、イギリスでは1881年～1890年の間、合理服

協会、合理服会、健康・芸術的衣服同盟等が設立された。この10年の間に改良服運動は、合理的な衣服と共に芸術的な衣服を目指そうとする動きを見せた。中でも健康・芸術的衣服同盟が推奨するデザインは、古代ギリシャの衣服を連想させるような、自然の力学に適った肩から自然に垂れ下がるドレープ豊かな衣服だった。

その背景には、ラファエル前派のロセッティ、バーン＝ジョーンズの絵画における古代・中世風の衣服表現や、アーツ・アンド・クラフツ運動のW.モリスやW.クレインらの衣服への関心が、直接的、間接的な関係として認められる。

しかし、イギリスにおける改良服運動は、19世紀と共に終わりを告げ、近代衣服の革新を遂げるほどには至らなかった。その要因はオートクチュールによるパリ・モード隆盛と、改良服運動があくまでも19世紀的な現象であったと考えられる。衣服がどのように改良されようとも、それらが歴史的・ロマン的なものに立脚している限り、19世紀的価値観の範疇にとどまらざるをえないものであり、来るべき時代への規範とはなりえなかったのである。そして改良服運動でよく使われた「合理」的な衣服という言葉自体にも、衣服がいつの時代にも持ち合わせていた「非合理」的な面を排除しようとした排他的な面があったのである。

***** 事務局から *****

★会費納入のお願い

今号に2008(平成20)年度 服飾文化学会会費(正会員6千円、学生会員3千円)の払込用紙を同封しました。5月末日迄にお振込み下さい。過年度未納の方も、ご確認のうえ振込みをよろしくお願いいたします。

★役員改選について

2007年12月より、選挙管理委員会による役員改選の準備が始まり、皆様には、郵送による投票にご協力いただきありがとうございました。2008・09(平成20・21)年度の新役員につきましては、会務の担当も含めて次号No.16でお知らせいたします。

☆新入会者 (2007年10月～)

正会員

齊 藤 佳 子	香川短期大学
豊 田 桜 子	女子美術大学他
吉 崎 八千代	東京都
分 部 清 香	

☆退会者

松 尾 陽 子	2007年10月
崔 釉 珍	2007年11月
長 嶺 倫 子	〃
垣 本 武 伯	2007年12月
石 原 頼 子	2008年3月
伊 藤 美智子	〃
鷹 司 綸 子	〃
早 川 礎 子	〃
深 井 晃 子	〃
前 田 俊 枝	〃
矢 部 洋 子	〃

※敬称略・五十音順

***** 編集後記 *****

早いもので、会報も15号の発行を迎えることになりました。先生方には、お忙しい時間を割いて、何かとご協力いただき御礼申し上げます

今後、ご研究、ご著書、作品発表ほか、さまざまな情報やご意見をお寄せいただき、それらを発信していく場となることを目標に、会報編集担当一同、努力していききたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

会 報 No.15：2008(平成20)年3月発行

編集発行人：服飾文化学会

事務局：101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1

共立女子大学 被服意匠研究室

TEL,FAX;03-3237-2496

E-mail;isho@s1.kyoritsu-wu.ac.jp

URL;http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp